

戦禍の理髪師(The War Barber/..حلاق الحرب)

戦争環境への強制的適応の一つとして個人的な必要性、特に 170 日を超える避難生活の中で、理髪の需要が急激に高まりました。

思い浮かぶ場所、思い浮かばない場所のどこにでも、理髪師は至る所に広がっています。なぜなら、理髪師が必要とするのは、プラスチック製の椅子、ハサミ、小さな櫛、カミソリ、タオル、そして客の髪を掃除する小さなブラシだけだからです。そうして、理髪師は偉大な人物や指導者、貧しい人々、物乞いなど、すべての人々を同じ椅子に座らせ、髪を整える準備をします。これは、シャワーを浴びることが避難生活の贅沢となった現状で、多くの男性は厚い髪や髭が生え、ホコリや虫が集まりやすくなっているためです。

南部や避難地域における人口過密と少数の理髪店、その結果、理髪師たちは豪華なサロンを置き去りにし、ワディ・ガザの南へと向かいました。客にとっての快適さとなる香水、石鹼の種類、バスローブの品質、ハサミの種類、理髪師の外見、サロンの清潔さ、そして道具の消毒はもはや重要ではなくなり、客の注意を引かなくなりました。

今ここでは、市場に広がる理髪師たちを見ることができ、海岸通りに行けば、通りや校門の前を歩き回る彼らを見ることができます。さらには病院の中でも出会うことができるのです。

今回の私の話はここから始まります。

アル・アクサ病院の中で、ある客と理髪師の会話を見聞きしたときのことです。私は友人と会うために病院の受付口の前で待っていました。そこは多くの殉死者や負傷者が病院に運ばれ、その家族たちの泣き声や叫び声が響く中、ドアの前に立って殉死者の魂のために葬儀の祈りを捧げる一団がいるという状況でした。私は非常に痩せた若い理髪師の横に立って待っていました。その理髪師は、彼よりもさらに痩せた 50 代の男性の髪を切っていました。

最初は、殉死者や負傷者、数十人のジャーナリストやカメラマンがいるこの場所に理髪師がいることに驚きました。どうしてこの若者は、この場所を理髪業の場として選んだのでしょうか。

私はすぐに、病院自体に多くの避難者がいることに気付きました。廊下や外にいる従業員、訪問者、販売員、そこにいる全員が理髪を必要としていることがわかり、私の驚きなどは無意味だと知りました。感情が麻痺しているのです。なぜなら、親愛なる読者たちよ、ここは戦禍の中にあるのですから！！

物語に戻りましょう。

この若者の過酷な生活への順応の闘いを見ていると、椅子に座っていた男性が唐突に白髪の束を拾い上げ、尋ねました「これは誰の髪ですか？」

理髪師は答えました「あなたの髪ですよ」

男性は「これは私の髪ではない。私の髪は真っ黒で、この髪は白い」と否定しました。

理髪師は答えました「アッラーに誓って、これはあなたの髪です。すべてが白いです」

男性は答えました「どうして？いつの間に？私は自分の髪をよく知っている。私の髪はこれまでずっと黒かった。いつ色が変わったのだ？……鏡を持ってますか？」

理髪師はそばに置いてあった黒いバッグのポケットに手を伸ばすと小さな鏡を取り出してその男性に手渡しました。数ヶ月間、自分の顔を見ていなかったのでしょうか、鏡を見た瞬間、彼は静かに泣き始めました。

理髪師はその仕事を続けるのを止めました。私にとっても、周りのすべてが止まり、悲嘆の叫びや救急車の音も聞こえなくなりました。病院の門を出ると、泣くような静けさに包まれ、全てが白く見えました。それはあの男性の涙の色と同じでした。私は、友人との約束も忘れ、足が次にどこへ連れて行くのか、わからないまま歩き続けました。

2024年3月26日

アリー・アブー・ヤースィーン

訳 藤田ヒロシ

(2024.8.30 改定)